

29. 当院における穿孔性十二指腸潰瘍の治療についての検討

(朝霞台中央総合病院外科) 八木美徳

1989年より1993年までの5年間、当院において、穿孔性十二指腸潰瘍は全26例で、そのうち観血的に治療を行ったのは20例、保存的に治療を行ったのは6例であった。

当院においては穿孔性十二指腸潰瘍の疑いをもたれた症例には上部消化管内視鏡、腹部CT等を施行し、その程度を判断し、また、年齢、潰瘍歴、患者の性格等を加味し、治療方針および手術術式を決定している。

今回は穿孔性十二指腸潰瘍の保存的療法を行ったものにつき、症例を呈示して報告する。

30. 当院における消化管穿孔(胃、十二指腸潰瘍穿孔を除く)23例の検討

(牛久愛和総合病院) 村瀬 茂

1989年より1994年1月までに当院で経験した胃、十二指腸潰瘍穿孔を除く消化管穿孔23例につき特に診断面から検討した。穿孔の原因は外傷、特発性、憩室、大腸癌、軸捻、魚骨等で、22例に手術を施行した。23例中20例において、概ね早期に腹腔内遊離ガスが証明されていた。遊離ガスを認めていない3例は、注腸造影で穿孔を確認した2例と腹腔内大量出血を合併した1例で、どちらも早期に手術を施行している。腹腔内遊離ガスの高い証明率は、当院ではいつでも緊急CT検査を、また繰り返し撮影可能であり、微量の遊離ガスが証明されるためと考えられる。当院では穿孔が疑われる症例に対しては来院時と翌日のCT検査、さらに大腸、十二指腸穿孔の疑いのある場合、造影を加えることで診断の遅延で失う症例が無いよう努めている。

31. 当院にて経験した興味ある内視鏡症例について

(中野江古田病院外科) 宮川隆平

当院にて経験した内視鏡症例の中で興味ある5例について報告する。内訳は消化管穿孔1例、消化管異物4例である。症例1は消化管穿孔の症例である。47歳、男性の腹部食道破裂による汎発性腹膜炎例であるが、全身状態が悪くドレナージ術にて救命し得た1例である。若干の文献的考察を加え、術中所見、術式を供覧する。症例2～5は、消化管異物の症例である。症例2は48歳、女性の胃内異物(義歯)の1例、症例3は45歳、男性の胃内異物(釘)の1例、症例4は24歳、男性の食道異物(正露丸のキャップ)の1例、症例5は66歳、女性の食道異物(PTP)の1例である。これ

らの消化管異物の4症例に関して、当院での内視鏡的異物除去術の工夫も交え、若干の文献的考察を加えて報告する。

32. 酸素運搬と酸素消費を指標とした重症管理について

(救命救急センター) 泰川恵吾

〔目的〕各種重症患者の管理に必要な酸素運搬量(DO₂)、酸素消費量(VO₂)および消費エネルギー量について検討する。

〔方法〕Swan-Ganzカテーテルによる代謝、循環管理を必要とした各種重症患者18例について、9時間おきにDO₂、VO₂を算出した。また消費カロリー量についてもFick法を用いて算出し、これらの値の変化と48時間以内の死亡率等について検討した。

〔結果および考察〕経過中、VO₂を100以上に保持することができた症例は10例で、48時間以内の死亡例はなかった。最終的にVO₂が100未満となった症例は7例で、48時間以内の死亡は3例(43%)であった。敗血症を除くほとんどの症例で消費カロリー量とVO₂とは、ほぼ正比例の相関を示し、状態によって大きく変動した。重症患者の管理においては、DO₂、VO₂および消費カロリー量を経時的に測定し、コントロールすることが重要な意義を持つと考えられた。

33. 悪性狭窄病変に対してステント留置を行った2症例の経験

(久我山病院外科) 米山公造

手術不能な悪性狭窄病変に内瘻化が可能なら、一定のQOLを患者に付加し得る。今回我々は食道癌と胆管癌患者に内瘻化を試みたので報告する。

症例1:53歳、男性。主訴:嚥下傷害。食道造影にて中部食道に約7cmの全周性狭窄を認めた。根治術目的で転院するも手術不能と診断され、放射線療法を66Gy施行後当院へ再入院となった。狭窄は軽度改善していたが経口摂取は流動物のみであったため、食道拡張術後人工食道を留置し退院した。

症例2:78歳、男性。主訴:黄疸。PTCD時に総胆管中枢部の全周性狭窄を認めた。経皮経肝的に胆管外瘻を拡張させ、ウオールステントを留置し、内瘻化に成功して一旦帰宅。しかし、1カ月後再狭窄をきたし、再び経皮経肝的にERBDチューブを留置して内瘻化をはかっている。

34. 新しいmetaric stentによる胆道内瘻化術の経験

(大分市アルメイダ病院外科) 笠井 恵